

「教科内容の明確化と体系化」についての検討

— 学習指導要領と学校体育研究同志会の比較 —

馬 渡 洸 二*・則 元 志 郎

An Analysis of “Clarification and Systematization of the School Curriculum”

— A Comparison with Course of Study and the Association of Kindred Spirits
of School Physical Education Research —

Koji MAWATARI*, Shiro NORIMOTO

(Received October 1, 2013)

I. はじめに

約 10 年ごとに行われている学習指導要領の改訂は、現代社会の変動、それに伴う児童生徒たちの問題点に立脚して行われるという基本的な特徴を持ち、教育現場において授業実践をめぐる研究を活性化させる一つの契機となることは間違いなく、このことは体育授業の研究についても当てはまるといえる。2008 年に小・中学校の新学習指導要領、2009 年には高等学校の新学習指導要領が 60 年ぶりの教育基本法の改正を背景に文部科学省から告示された。この 2008 年改訂学習指導要領では、「小・中・高等学校の 12 年間を見通して指導内容の明確化・体系化を図る」ことが基本的な考え方として提言されており、中央教育審議会答申（2008）によれば、「発達の段階に応じた教育課程の工夫・改善の視点から、各学校種間の円滑な接続への配慮」が強調されている。すなわち、小・中・高等学校 12 年間を見通した目標と内容を設定し、「いつ」、「どこ」で、「何」を学ばせるかといった発達段階に応じた教科内容を明確的・体系的にとらえ、12 年間の見通しに立って教育課程を構想することが今求められているのである（日野，2011）。

今までの体育は教える中身が曖昧であり、繰り返しの細切れ単元に慣れきってしまった（森他，2008）。それで果たして各発達段階で内容は高まっているのか、今後は内容のつながりをもたせ全体を通して体育は何を教えるのかを考えていくべきではないかと思われる。そのためには、「教科内容の明確化と体系化」の課題や問題点を把握し、小・中・高等学校 12 年間の発達段階に応じたより具体的な教科内容を明らかにし、系統性のある教育課程を編成していく必要があると考える。さらに、どのように体育の授業へと結びつけるかを学習指導要領と学校体育研究同志会の体育に関する考え方や、先行研究などを基に整理し考えを深めることにしたい。

II. 研究目的

2008 年改訂学習指導要領によれば、「学校段階の接続及び発達の段階に応じて指導内容を整理し、明確に示すことで体系化を図る」と明記されている。しかし、これまでの体育は繰り返し単元で授業が行われることが多く、本当に教科内容が明確化され、各学校種・各学年で教科内容の体系化が行われているのかどうか疑問に思われる。

そこで本研究では、学習指導要領と学校体育研究同志会の体育に関する考え方を比較して、なぜ「教科内容の明確化と体系化」が体育の重要な課題となり実現されないのか、その問題点を明らかにし、解決策を探ることを目的とした。

* 熊本大学大学院教育学研究科

Ⅲ. 研究方法

「明確化」と「体系化」に関する文献を学習指導要領、学校体育研究同志会のそれぞれ2つの立場から収集し、内容を整理し、比較・分析した。

Ⅳ. 結果及び考察

Ⅳ-1 学習指導要領の変遷と学校体育研究同志会の実践研究の流れ

学習指導要領は、1947年改訂から現行2008年改訂までにどのように内容が変化したのか。対して学校体育研究同志会においては、主な実践研究について表にまとめた。「教科内容の明確化と体系化」についての内容に着目する。

2004年12月に発行された『体育実践とヒューマニズム』より、学校体育研究同志会とは、1955年1月19日、東京・世田谷の和光学園で、丹下保夫が発起人になって発足。「同志会は、『運動文化論』に基づく体育・スポーツ論を展開している研究団体」と内外からも言われているように、「運動文化論」は、同志会の理論上、研究実践上の代名詞でもある。まさに教育実践と研究のための集団・組織である。学校体育研究同志会の研究は実践現場に研究の足場を求め、理論と実践を統一することを基本的なスタイルとしている。また、学校体育を「国民運動文化とその体制の創造」の中に位置づけ、体育科教育の任務(目的)を「スポーツ分野における主権者の形成」

表1 学習指導要領の変遷と学校体育研究同志会の実践研究の対照表

学習指導要領		学校体育研究同志会	
1947年改訂	<ul style="list-style-type: none"> ・戦後の新学制の発足 ・問題解決学習 ・指導要領は「試案」とされていた 	1955年	<ul style="list-style-type: none"> ・丹下保夫が発起人になって発足
1958年改訂	<ul style="list-style-type: none"> ・指導要領の法的拘束力強化「試案→基準」 ・教員の管理体制が強まる ・学校運営の硬直化と閉鎖体質 ・能力適性に応じる教育 	1960年代以降	<ul style="list-style-type: none"> ・「技術指導の系統性」研究と「グループ学習による民主的集団づくり」の研究
1968年改訂	<ul style="list-style-type: none"> ・体力づくり、業間体育 ・学習制度の多様化と能力、適性に応じた教育 ・クラブ活動の必修化 	1970年代以降	<ul style="list-style-type: none"> ・「体育は何のために何を教える教科か」の追究が展開される →体育同志会の学力論、教科内容構成論の研究 →「体育は何を教える教科か」=「運動文化に関する科学的研究の成果と方法を教える」
1978年改訂	<ul style="list-style-type: none"> ・「楽しさ」と「意欲・関心・態度」が一面的に強調される ・個別学習 ・教師「教え」や「指導」→「支援」 	1980年代	<ul style="list-style-type: none"> ・「スポーツの権利主体にふさわしく獲得されるべき学力」として①技術的、技能的能力②組織・運営管理能力③社会的統治能力の3つ
1988年改訂	<ul style="list-style-type: none"> ・生涯体育・スポーツの重視 ・個別化・選択制 ・習熟度別・課題的学習 ・体力問題への関心 	1980年代終盤	<ul style="list-style-type: none"> ・教科内容研究の始まり
1998年改訂	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しさ中心、ゆとり ・教育課程基準の大綱化、弾力化 ・機能的特性や「子どもからみた特性」 ・特色ある学校づくり 	1998年	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程自主編成プロジェクト開始
2008年改訂	<ul style="list-style-type: none"> ・教科内容中心カリキュラムへの転換 ・児童の発達段階を踏まえ指導内容の明確化を図る ・指導内容の確実な定着を図る観点から、運動の系統性を図る ・体育・保健体育科の指導要領は、「4・4・4の原則」で発達段階が構成されている 	2003年	<ul style="list-style-type: none"> ・体育同志会の教育課程試案の刊行 →「体育同志会版指導要領」ではない

であると規定し、運動文化論と、それに基づく体育の実践研究に取り組みながら会独自の理論と実践を構築してきた。代表的な実践に「ドル平」「ねこちゃん体操」などがある（川口他，2004）。

学校体育研究同志会の「教科内容研究」とは、スポーツの文化的認識を獲得・交流し合い高め合う活動をどう組織するかについての研究のことである。また、1998年に海野他によって立ち上げられた「教育課程自主編成プロジェクト」とは運動文化論に立脚し、小学校から高等学校までの12年間にわたる「学力と人格形成のプログラム」を描き出そうとすることを目的としたプロジェクトのことである。

表1を見ると学習指導要領では、2008年から「指導内容の明確化と体系化」について明記されている。しかし、それ以前には「指導内容の明確化と体系化」に関する詳しい記述はないと思われる（久保，2008）。

対して学校体育研究同志会では、1960年頃から「教科内容の明確化と体系化」について実践研究を行っている。また、久保（1993）によれば「体育の『教科内容』を明確化・体系化することがその存立基盤を確立するのに不可欠であり、『教科内容』を軸に体育実践を創ることが『体育実践に新しい風を』おくることにつながる」という。さらに、「一人ひとり異なる子どもに共通の普遍的『内容』を習得させたいと教師が思わずに、『個々』に応じた『めあて』子どもに選ばせるのは、教材研究を必要としない教師が増えてしまうことにつながる」と危機感を感じた発言をしている。

IV-2 学習指導要領と学校体育研究同志会の体育学習の考え方に関する比較

制野（2009）によれば、「これまでの学習指導要領では『めあて学習』や『習熟度別学習』が行われてきているが、これらに対して学習集団の分断、子どもたちの技能や教師の『指導力』の低下が指摘されてきた。にもかかわらず、全国では『めあて学習』一色になっていき、今でも『習熟度別学習』は行われ、これでは能力差を拡大してしまい、発達の可能性に道を閉ざすのではないか」という。対して、これまでの学校体育研究同志会では、学習指導要領の「個別化学習」ではなく「異質協同」での学習が重要であり、ここに両者の大きな相違点がある（黒井，2009）。しかし、文部科学省は2008年改訂学習指導要領から「指導内容の体系化」を図るために小学校低学年から高等学校までを「4・4・4の原則」にそった発達段階と教科内容の体系として、系統的に組み立てられたものを学習指導要領で示している（森，2008）。それに対して、学校体育研究同志会では教科内容の明確性に関しての実践・研究報告は成されてはいるが、このような「体系化」に関する実践・研究報告が少ないように感じられる。しかし、同志会は「体系化」と同義語を探す言葉として、「入口」、「出口」、「卒業」などを使用している（岨，2008）。

IV-3 学習指導要領と学校体育研究同志会における体育学習の問題点の把握

これまで学習指導要領と学校体育研究同志会の体育学習に関する考え方には、曖昧な内容がされていることや、指導体系を示すものがないなどの疑問に思う点があるため、両者の問題点を見つけ比較してみた。

表2 学習指導要領と学校体育研究同志会における体育学習の問題点の対照表

2008年改訂学習指導要領	学校体育研究同志会
<ul style="list-style-type: none"> ・抽象的な内容表現 ・実践の硬直化 ・運動の取り上げ方の弾力化、学び方重視 ・教科内容の「接続」部分の不明確 	<ul style="list-style-type: none"> ・できない子どもに全体を合わせて指導を行う ・子どもの必然性に頼りすぎてしまう ・教科内容の「接続」部分の不明確

2008年改訂学習指導要領では、抽象的な内容表現が目立つということでボール運動を例に取り上げてみると、中学校第1学年次と第2学年次の技能で、「ゴール型では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防を展開すること」、またボール操作に「フリーの味方へのパス」の記述がされてあるが、空間はどのようにしてできたのか、どうしてフリーの味方ができるのだろうか、特に防御に関する記述がないに等しいところからも疑問に思わざるを得ない。また、教科内容が細かく例示されたことで、「例示」されたことがいつしか「提示」になり「実践の硬直化」の危険性が大きくなるということが指摘されている（前田，2011）。

表2は、両者の共通の問題点として、教科内容の「接続」部分が不明確ではないかと思う理由を挙げている。学習指導要領は、「できる子」には学習指導要領の書かれてある部分から指導し、「できない子」にはできない所から指導をしている場合が多い。しかし、それでは「できる子」と「できない子」の能力差が出てしまう。対して学校体育研究同志会は、できない子に全体を合わせて授業を行う。現実的に子どもを見て、技能レベルが一番低い所に合わせて授業をするため、全体的にみんなのできるレベルが低くなってしまふ。例えば、学習指導要領は泳げる人は泳ぐ、泳げない人は泳げないところから指導を行う（小山，2011）。対して学校体育研究同志会は、

異質協同のグループ学習の中で、できないだれかのためにできるようになるプログラムを用意し、自分以外のだれかをうまくした経験をさせる（矢部，2008）。果たしてこれらの指導は、各校種間で円滑な接続が行われているといえるのだろうかと思われる。

IV -4 教科内容の「接続」部分を明確にした実践

学校体育研究同志会の「ボール別の指導体系（段階に応じた指導）」（則元，2011）というタイトルで行われた戦術（作戦）を教える才藤・平田・佐藤・殿垣で行われたフラッグフットボールの授業実践である。

この第2段階の授業内容には、1次（2時間）に（感覚づくりゲーム）という記述がされている。この感覚づくりゲームとは、前段階からのつながり部分を示しており、15時間授業へつなげるための前学年の内容を復習するものであり、授業の始まりに組み込まれる。こうして授業に系統性を持たせようと考えられた実践である。

まだこのような実践は多くはないが、実際に行われている実践であることから、各学校種のつながりや各学年のつながりに関して、前学年の内容を復習する時間（感覚づくりゲーム）をとることが教科内容の「接続」に関しては重要であると考えられる。

表3 戦術を学ぶフラッグフットボール(第2段階)の単元計画

1次 2時間	3on3でI層ゲームを楽しもう！ ※6人×6班編成（感覚づくりゲーム）リーグ戦 ①I層ゲームルール説明 ②戦術図を描く練習 ③コーチとハドルを重視 戦術を各班から発表させ、クラス全体で共有する
2次 3時間	II層のDfを学ぼう ※3on3(兄弟班で学習・練習) ①プレスDfと対応したOf ②マンDfと対応したOf ③ゾーンDfと対応したOf ※III層Dfが出現したら、使わないように指示する。
3次 3時間	III層のDfを学ぼう ※3on3(兄弟班で学習・練習) ①プレスDfと対応したOf ②マンDfと対応したOf ③ゾーンDfと対応したOf
4次 5時間	III層でのコートバランス ※5on5で行う 初期のII層 3-2,2-3から変化 III層でのフォーメーション 2-1,2,3-1,1,2-2-1など ※ポジションとフォーメーションの関係を考える。 Dfフォーメーションは3種類の攻撃の基本戦術(①パスワーク,②フェイント・ラン,③ブロック)がベースとなる。 Dfフォーメーションは3つの層と3つの防御の基本戦術(①プレス,②マン,③ゾーン)がベースとなる。
5次 2時間	フォーメーション発表会とまとめ 実演と解説しながら各班のフォーメーションを発表する。

※時間数は大まかな目安である。モデル(表)は15時間構成。

V. まとめ

学習指導要領と学校体育研究同志会の体育に関する考え方を比較することで、それぞれの体育学習についての問題点を把握することができた。そこから、「教科内容の明確化と体系化」が実現されない共通の問題点が明らかとなり、解決策も探ることができた。以上のことから、以下の2つを本研究のまとめとする。

1. 学習指導要領と学校体育研究同志会はともに各学校種・各学年における教科内容の「接続」部分が不明確であることが問題点として挙げられる。
2. 各学校種間および各学年間の円滑な接続を実現するために、各種目において各発達段階に応じた系統性ある指導課程プログラムを作成した上で、前学年の復習の時間を必ず次学年の始めの授業に組み込み、全体の教科内容習得状況をそろえる必要がある。

参考資料及び引用・参考文献

【学習指導要領】

- 藤生栄一郎（2004）③小・中・高12年間を見通した高校での実践。体育科教育，52（8）：62-65。
 日野克博（2011）体育の教育課程をデザインする5つの視点。体育科教育，59（4）：14-17。
 小林篤（1998）学習指導要領作成者への事前の要望。体育科教育，46（10）：9。
 小山浩（2004）④小・中・高12年間を見通した中学校での実践。体育科教育，52（9）：62-64。
 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説 体育編。東洋館出版社。
 文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説 保健体育編。東山書房。
 文部科学省（2009）高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編。東山書房。
 文部科学省（2008）中央教育審議会答申。

- 文部省（1998）小学校学習指導要領解説 体育編．東山書房．
- 文部省（1998）中学校学習指導要領解説 保健体育編．東山書房．
- 文部省（1999）高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編．東山書房．
- 中塚義美（2003）小中高 12 年間を見通した体育の授業づくりへ向けて．体育科教育，51（11）：48-51．
- 岡出美則（2013）ナショナルスタンダードとしての学習指導要領を検証する．体育科教育，61（7）：10-13．
- 白旗和也（2011）今だからこそ確認したい新学習指導要領のポイント．体育科教育，59（4）：18-21．
- 高橋健夫・久保健（1998）新しい学習指導要領を考える．体育科教育，46（10）：13-21．
- 友添秀則・高橋健夫・佐藤豊・伊藤久仁・木下光正（2008）新学習指導要領と体育－何が，どう，なぜ変わり，どうなるのか．体育科教育，56（6）：10-19．
- 宇土正彦（1989）新教育課程とこれからの学校体育．体育科教育，37（6）：10-14．
- 山本悟（2004）⑤小・中・高 12 年間を見通した小学校での実践．体育科教育，52（10）：52-55．

【学校体育研究同志会】

- 平田和孝（2011）同志会の実践研究の成果に確信を持ち，更なる運動文化論の探求を．たのしい体育・スポーツ，30（5）：12-15．
- 堀江邦昭（1990）「90 年代の課題」．運動文化研究，8：1-3．
- 出原泰明（1990）「認識と習熟の変革過程を学習対象にする」とは．運動文化研究，8：81-86．
- 石田智巳（2011）改訂学習指導要領と今後の体育実践—意味を問い直す実践．たのしい体育・スポーツ，30（4）8-9．
- 川口智久他（2004）体育実践とヒューマニズム 学校体育研究同志会 50 年のあゆみ．創文企画：6-9．
- 小山吉明（2011）学習指導要領と私たちが考える教育課程．たのしい体育・スポーツ，30（6）：14-19．
- 子安潤（2011）新学習指導要領と教育課程のアンラウン．体育科教育，59（4）：10-13．
- 久保健（1989）体育・新学習指導要領批判．体育科教育，37（6）：36-38．
- 久保健（1990）新学習指導要領をどうのりこえるか．運動文化研究，8：75-80．
- 久保健（1993）まとめにかえて．体育実践に新しい風を，大修館書店：252-260．
- 久保健（2008）新学習指導要領（小学校体育科？中学校保健体育科）の批判的検討．運動文化研究，25：24-33．
- 黒井信隆（2009）新学習指導要領に向き合う中学年体育．たのしい体育・スポーツ，28（8）：28-31．
- 前田雅章（2011）どこかで私たちは学習指導要領を乗り越えるしかない．運動文化研究，28：1-9．
- 森敏生他（2008）座談会・改訂学習指導要領と同志会の課題．運動文化研究，25：36-47．
- 森敏生（2008）体育同志会は発達の階梯をどう考えるか．たのしい体育・スポーツ，27（11）：27-30．
- 新村博信（1990）「新学習指導要領徹底分析と同志会実践」．運動文化研究，8：73-74．
- 西田佳（2011）新学習指導要領・教職の分業体制を乗り越え，「みんなで意味を問い直す」学びの創造を．たのしい体育・スポーツ，30（5）：28-29．
- 則元志郎（2011）ボール運動・球技の技術・戦術指導の構想．運動文化研究，28：60-61．
- 大貫耕一（2008）新教育基本法体制（2008 年学習指導要領）の検討．運動文化研究，25：8-23．
- 大貫耕一（2008）低学年体育の授業づくり・まとめと課題．たのしい体育・スポーツ，27（11）：15-17．
- さいたま大会基調提案作成委員会（2010）夢・つながり・創る—学び合い，高め合う体育・スポーツの喜びを—．運動文化研究，27：74．
- 制野俊弘（2009）新学習指導要領に向き合う中学体育．たのしい体育・スポーツ，28（2）：28-33．
- 岨和正（2008）高学年体育の授業づくり・まとめと課題．たのしい体育・スポーツ，27（11）：21-23．
- 田中新治郎（2000）「学習の個別化・選択制と教科体育のゆくえ」．運動文化研究，18：16-22．
- 田中新治郎（2013）画一的な教育からの解放を．体育科教育，61（7）：14-17．
- 堤吉郎・安武一雄（2000）私たちの教育課程自主編成の歩み—教育課程自主編成プロジェクト報告—．たのしい体育・スポーツ，19（6）：36-39．
- 矢部英寿（2008）中学校体育の授業づくり・まとめと課題．たのしい体育・スポーツ，27（11）：24-26．
- 安武一雄（2008）中学年体育の授業づくり・まとめと課題．たのしい体育・スポーツ，27（11）：18-20．